第２回 堀さげ隊 解説資料

令和６年１月 13 日（土）

主催：吉田城の堀さげ隊
サポート課：豊橋市文化財センター

イラスト製作：春川元太郎

★解説１：本丸西側の内堀

・幅 25m、深さ約 5m、全長約 105m。鉄櫓（くろがねやぐら）から千貫櫓（せんがんやぐら）・南多門（みなみたもん）南側土橋まで、L 字型に延びる。
・断面台形の箱堀（画像①）。城内では酒井忠次期の断面 V 字型の薬研（やげん）堀も見られる（画像②）

★解説２：鉄櫓（くろがねやぐら）下石垣に見える目地

・鉄櫓下石垣は高さ 12.7m、幅は北面 17.6m、西面 36.0m。50 ～ 60° の傾斜を持つ。
・複数の目地→築造単位か、または池田照政期に築かれて以来の積み直しの痕か（画像③）。
※現存する鉄櫓被災記録：①宝永４年 (1707) 地震…北西に傾き大破 ②嘉永７年 (1854) 地震…半壊・取り壊し。

★解説３：鉄櫓（くろがねやぐら）下石垣の基礎構造

・現在の堀底から 1.2m 下まで石垣があることを確認。さらにその下 0.8m まで石組基礎を確認（画像⑤）。
・堀底を掘り込み、礫混じりの土砂を突き固め、根石を置く。石組基礎を築いた後、外側に粘土や土砂を突き固め、互層にする（画像⑥）。規模は小さいが、類似例は大和郡山城（やまとこおりやま）や天正期駿府（すんぷ）城で見られる。
※胴木（どうぎ）（松材）の上に根石を置き、築石（つきいし）を積む方法が一般的。

★解説４：鉄櫓（くろがねやぐら）台南東隅部

・高さ約 2.9m。現在の地面より下は池田期のオリジナル。地上の石垣は昭和 29 年以降の積み直し（画像⑧）。
・石垣から 3m の範囲に川原石が敷かれ、櫓の屋根から落ちる雨水から地盤を保護するものか（画像⑧）。
・根石より下層から炭層・焼土層を確認（画像⑨）。遺物から池田照政入城直後の可能性。南多門東側石垣の調査でも確認され（画像⑩）、本丸全域で見られる。

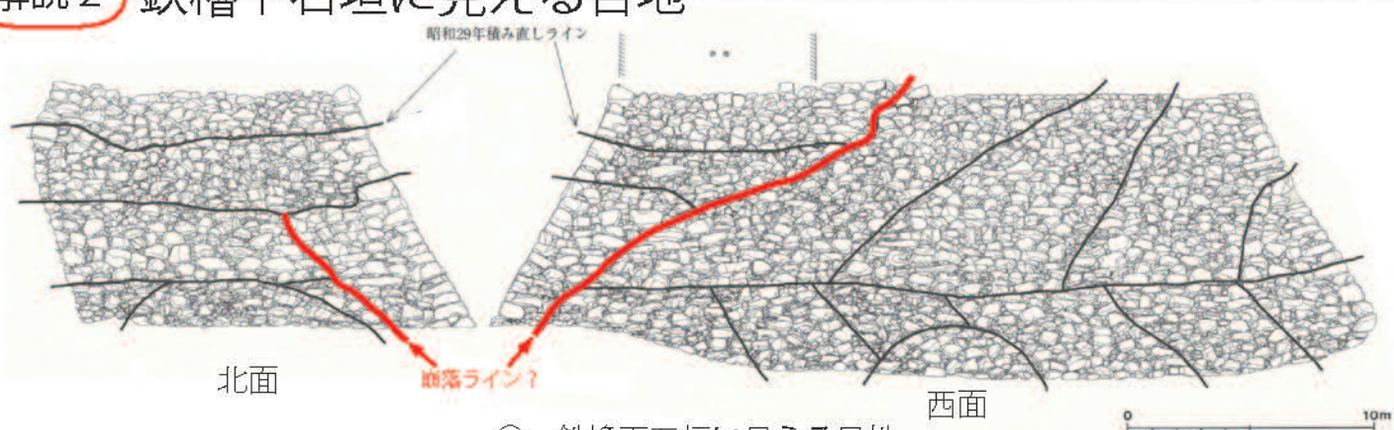
※酒井忠次期：1565 ～ 90 年、池田照政期：1590 ～ 1601 年

解説１ 本丸西側の内堀

① 箱堀（本丸西側の内堀）

② 薬研堀（三の丸東側の堀）

解説２ 鉄櫓下石垣に見える目地

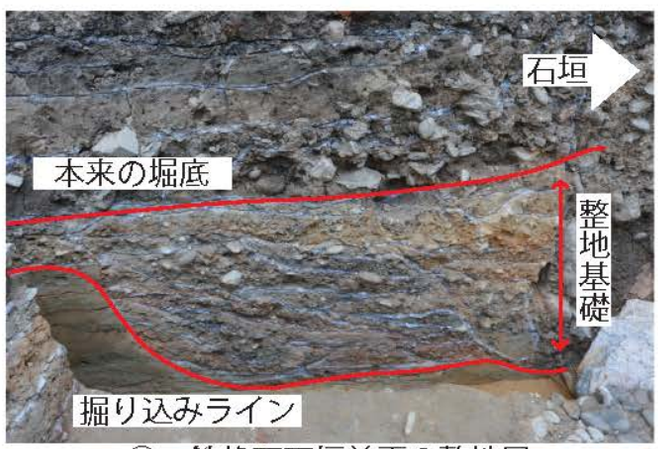


③ 鉄櫓下石垣に見える目地

解説３ 鉄櫓下石垣の基礎構造

④　鉄櫓下石垣と堀底の調査区全景

⑤　鉄櫓下石垣の基礎構造



⑥　鉄櫓下石垣前面の整地層

解説４ 鉄櫓台南東隅部

⑦　鉄櫓台南東部の調査区全景

⑨　根石の下に潜り込む戦国末期の炭層

⑧　鉄櫓台南東部南面の石垣下部

⑩　南多門東側石垣内部で見られた焼土層